

Resecularization in Iran and Turkey: A Comparative-Historical and Theoretical Inquiry

International Workshop: 26 November 2017 (Sunday)

Roundtable: 27 November 2017 (Monday)

Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES)

Beirut, Lebanon

「イランとトルコにおける再世俗化—比較歴史学的・理論的研究」と題された、2 日間にわたる国際ワークショップならびにラウンドテーブルは、日本・トルコ・イギリス・オーストラリアから研究者を招き、ベイルートの「中東研究日本センター」（東京外国語大学）にて開催された。



最初に、松永泰行（A01 班代表）は、secularism および secularization の概念について整理をおこなったうえで、今回のワークショップおよびラウンドテーブルのキー・コンセプトである desecularization と resecularization について説明した。ここでは、desecularization は secularization に対するカウンター・ムーブメントとして、resecularization は宗教の復興・支配を一定期間経験したのちに生じた国家・宗教関係の再制度化に関する闘いとして、参加者に理解が共有された。

トルコの事例について報告した 3 名は、それぞれ異なる視点からではあるが、国家・宗教関係における宗務庁（Diyanet İşleri Başkanlığı）の役割に言及したものとなった。

Umut Azak (Okan University, Turkey) の報告では、現在トルコは公正発展党政権 (AKP) のもとで *desecularization* が進行している状況にあると受け止めたうえで、トルコにおける *secularism* が宗教 (スンナ派イスラーム) を抑制するのではなく制御あるいは操作しようとしてきた歴史を振り返った。そして、「*secularization* を推進する国家」と「*desecularization* を推進するイスラーム勢力」という構図ではなく、国家が *secularization* と *desecularization* の双方を担ってきたと指摘した。そしてそのどちらの際にも、宗務庁が中心的な役割を果たしており、その対象はあくまでもトルコで大多数を占めるスンナ派に限定されていたという分析は、続く 2 名の報告に共通する背景を提供するものであった。また、*resecularization* が、2013 年頃に生じた反政府抗議運動を契機として新たな広がりを見せているという見解は、*secularism* をひとつの柱とする国是・アタテュルク主義 (ケマリズム) の展開を考えるうえでも、非常に興味深いといえる。

Sevgi Adak (Aga Khan University, UK) と Ceren Lord (University of Oxford, UK) の報告は、ともにとくに宗務庁に焦点を当てたものでありながら、その独立性についての見解は対照的であった。Adak は、現在のトルコでは宗務庁が *desecularization* を担っており、現行憲法における *secularism* の枠組みを壊すことなく、家族やジェンダーといった分野で宗教的領域を拡張しつつあると指摘した。また、宗務庁のこうした方針は、AKP 政権のもとでその政策に従うかたちで進められてきたと分析した。一方 Lord は、宗務庁が *desecularization* において重要な役割を果たしている点は認めながらも、歴史的にも政権からは一定程度独立した主体的なアクターとして活動していると論じた。そして、AKP 政権下では、宗務庁のウラマーたちが自ら宗教的な領域の拡張を図っていると指摘した。

続く Naser Ghobadzadeh (Australian Catholic University, Australia) の報告では、イランの事例が取り上げられ、イスラーム革命を経ても継続している民衆のシーア派の伝統 (「隠れイマーム」の理解など) と、革命によって成立した政府の理解・実践におけるシーア派との重要な相違がしてきされた。とりわけ、民衆に根付いたシーア派の伝統によると、宗教は政治から距離を置くことになり、政府の現状と一致しない。この点において、イランの *resecularization* は、シーア派の非政府化 (*de-governmentalization*) という観点から論じることができるとした。

このワークショップならびにラウンドテーブルでは、キー・コンセプトである *desecularization* と *resecularization* を用いたことで、トルコ・イランの事例をそれぞれが互いに比較可能なかたちで整理することに成功し、国家・宗教関係をよりの確にとらえることができるようになったといえるだろう。また、Azak が示したような、同じアクターでも時期によって *desecularization* の推進者にも *resecularization* の推進者にもなりうるという観点は、トルコとイランに限らず、他の国や地域について考察する際にも非常に有効なものだといえる。しかし一方で、こうした議論を進める際には、現政権の政策をどのようにとらえるかという点を避けて通ることはできず、とくにトルコの場合は、共和国初期からの *secularism* のあり方と AKP 政権の政策の関係性をどう評価するかという難しい問題をはらんでいると思われる。今後は、ディスカッサントとして参加した Gianluca Parolin (Aga Khan University, UK) からの指摘にもあったように、イラン政府の政策についての議論をより深めることができれば、トルコとの比較という文脈においてさらに新しい発見が期待できるだろう。